

フェリス女学院大学におけるゲスト講義

2023年10月31日(火)、国際緑化推進センターの仲摩栄一郎主任研究員が、フェリス女学院大学(神奈川県横浜市)において、約1時間半のゲスト講義を対面で実施しました。この講義は、同大学の佐藤輝教授(資源利用学、地球環境論)からの依頼により、毎年1回開催しており、今年は約60名の学生が聴講しました。

まず、講義前半のテーマとして、「君も海外協力隊だ!」と題して、JICA海外協力隊の概要(目的、制度、派遣国)を説明し、現地の活動及び生活の様子を写真や動画を用いて解説しました。その後、仲摩研究員が約25年前に海外協力隊員として南米パラグアイに赴任したときの経験を基にして、「国際協力の現場で一番大切なものは何か?」について考察を行いました。日本からやって来た外国人でも、現地の人々と一緒に生活をし、彼らのニーズを的確に把握して、まずそれをきっかけにして協力することが重要であることを学生達に伝えました。



仲摩主任研究員による講義

1-4. パラグアイ2年間の成果



住民の家の庭にマンゴーの苗木を植栽
山から実生苗を引いてきて自分の土地に植栽

講義スライド:「君も海外協力隊だ!」



講義スライド: スンバ島における森林回復の手順



森林生態系について、
小さい頃から環境教育!
✓ 植物、動物の基礎知識
✓ 野外活動、野菜栽培実習
✓ 環境絵画コンクール等

講義スライド: スンバ島における森林環境教育

次に、講義後半のテーマとして、「インドネシアの国立公園における住民参加型の森林回復プログラム」と題して、仲摩研究員が2015年から約5年間、インドネシアの東ヌサテンガラ州の「忘れられた島」と呼ばれるスンバ島において、植林プログラムに従事したときの経験を話しました。スンバ島は、かつては豊かな森林に覆われていましたが、過放牧や野焼きで荒廃し、現在の森林被覆率は10%程度しかありません。そこで、貴重な動植物の生息地である森林を回復することを目的として植林を実施しました。植えた木々が森林に成長するまでには山火事を防止する必要があります。そのためには地域住民の理解と協力が不可欠であり、地域住民との対話、及び住民のニーズである農業・牧畜業及び保健衛生面への支援を通して地域住民と協力関係を築くことの大切さを学生達に伝えました。

講義後に、佐藤輝教授のファシリテートにより、学生達からの的確な質問があり、仲摩研究員の追加説明やディスカッションを通して講義テーマの理解が深まりました。後日、学生達から、講義の意見・感想に加えて、お礼と応援のメッセージを頂きました(例えば「途上国での環境問題はただ原因を追究するだけでなく、住民の方々にとってもメリットのある形を模索することが大切だ」等)。本講義によって、世界の森林資源の保

全や持続的な利用についてフェリス女学院大学の学生達が現状を学ぶ一助になるとともに、今後の彼女達の人生にとって何かしらのお役に立てば幸いです。

ミャンマー植林箇所視察報告

ミャンマーでは、株式会社和漢薬研究所様や株式会社東京木工所様など多くの皆様からのご寄付をいただき熱帯林造成事業での植林を1997年から行ってきました。今回、これまで植林した箇所の現地視察を弊センターの高原専務理事が2023年5月14日から5月21日にかけて行いましたので、皆さんにお知らせします。

(1) S.P.K.コミュニティフォレスト (2005～2008年植栽)

本箇所は、ユーカリ、チーク (*Tectona sp.*)、アカシア、タガヤサン (*Senna siamea*) 及びその他ニーム、ココ (*Albizia lebbek*) など複数樹種を植栽しています。植栽後15～18年が経過していますが、例えばユーカリの樹高は8～10mで、道端で生長が良いものでは16mになるなど、良く成長しているとともに、沢地形では天然更新により生育した樹種も見られ、自然植生が回復している様子が見受けられました。ユーカリは、家屋の建築に用いられるポールや燃料材として使われており、2回目の萌芽更新している状況も見られ、良く利用されていました。



(2) カバニ・コミュニティフォレスト (2008～2013年植栽)

本箇所は、ユーカリ、ビルマチーク、ニーム、ココ (*Albizia lebbek*) の複数樹種を植栽しています。植栽後10～15年が経過していますが、良く成林していました。本林分は、近隣の村で、河川の氾濫により移住をせざるを得なかった村の村人により、燃材として使用されているとのことでした。ユーカリの枝が伐採されているところ、また、過去に伐採されたユーカリが萌芽更新により、更新している状況を確認しました。

(3) ラトケ・テトランカン村 (2019～2020年植栽)

ラトケ・テトランカン村の植栽地については、Government disposal siteと呼ばれる土地であり、政府の管理地ではありますが、森林局が他部局からの許可を得て、住民との合意・協力の下、ユーカリ、アカシアカテチュー、ビルマチーク、ステルクリアの植林を実施しています。本地区も、乾燥が著しく、湿潤地域のような成長は難しいですが、植栽木は活着しており、特にユーカリについては上長成長も良好でした。



(4) レバンデ村 (2022～2023年植栽)

2022～2023年に、森林局の管理地内で、地元住民との共同により、ユーカリ、アカシアカテチュー、ビルマチーク、ステルクリアの植栽が実施されました。2022年の植栽時期が少し遅れたもの(7月)については、すぐ乾季になったため苗木の定着から成長に至るまでの十分な期間がなく、ユーカリについては比較的良い成長を示しているものの、それ以外の樹種については、植栽後の成長は視察時点では大きくはありませんでした。しかし、多くは活着しており、視察時期後の雨季の成長が期待できる状況でした。

◆まとめ◆ 現地は、乾燥が厳しく、また経済的にも貧しい地域にもかかわらず、植林地がしっかりと維持され、地元住民にも活用されていることが今回の視察により確認できました。ミャンマー国の諸情勢は厳しいですが、今後も同国における植林事業の継続について検討していきたいと考えています。

ご支援へのお礼

令和5年12月までのJIFPROへの熱帯林造成のためのご寄付の総額は約660万円となっています。企業の皆様やSyncable(ネット募金)を通じたご寄付、カタログギフトを通じたご寄付、更に銀行口座への直接のお振込みなど、本当に多くの皆様からご支援をいただいています。こうした皆様からのご支援をもとに今年度はベトナムとカンボジアで植林を実施しております。この場をお借りして、皆様からのご支援へのお礼を申し上げます。これからも今回のミャンマーのように熱帯林造成の活動内容についてnewsletterでご紹介していきたいと思っております。

